

研究論文

行政における仏教の文化資源化

——柴又帝釈天の庚申信仰を事例として——

小高 絢子（絢華）

はじめに

本稿の目的は、東京都葛飾区の観光政策を対象に、行政における仏教文化の資源化のプロセスに着目し、その意味付けの変遷を考察することで、仏教者外部からの現代の仏教への影響を明らかにすることにある。すなわち、行政はどのようなプロセスで仏教を資源化するのか、またその過程でどのように意味付けが変化するのか、それらが仏教にどのような影響をもたらすのか、といった問いの考察が、本稿の射程である。

その背景には、日本の仏教に影響をもたらす現象として観光化があり、現代の日本仏教の状況や展開を把握するために、消費主義社会において変容する仏教への着目が不可欠である、という筆者の問題意識がある。

近年、日本の仏教に関しては、檀信徒の減少や葬儀の簡素化、廃寺の危機に陥る寺院などに注目が集まり、「寺院離れ」という形での仏教の衰退や、寺院の影響力の低下が指摘されている^①。その一方で、観光雑誌やインターネットサイトには「訪れるべき寺院十選」、「初詣に行きたい寺社ランキング」といった文字が並び、一般的には宗教に関心がないと言われる層^②にも、寺院や仏教に対する興味関心がゆるやかに広がっている様子をうかがうことができる。ま

た、令和二（二〇二〇）年に拡大したCOVID-19（新型コロナウイルス）による外出自粛制限を機に、オンラインでのリモート参拝やバーチャル巡礼、インターネット経由で御朱印・御首題のやりとりを行う寺院が増えたことは記憶に新しい³。そのような対応が試みられる背景には、それらを求める人々、すなわち寺院に対する需要や、関心を持つ層の存在を見出すことができるだろう。

つまり、現代の日本仏教においては、従来寺院を支えてきた檀信徒の減少や、信仰心の変化による寺院や仏教の衰退が叫ばれる一方で、これまで以上に広い層に観光対象としての参詣や、御朱印や御首題といった宗教的なモノへの関心の高まりが見られる状況にあるといえよう。

このような状況は仏教に限らず、現代の宗教全体にも通じるものがある。宗教社会学者の井上順孝は、「宗教情報ブーム」として、制度・組織的な宗教への帰属とは別の次元での宗教への関心の高まりと、宗教に関する話題が大量に消費される状況があることを指摘している⁴。また、山中弘は、特に宗教と観光消費との関係に焦点を当て、J・ベックフォードやV・ミラーの論を引きながら、元来宗教組織に体系的に組み込まれていた宗教的な思想・実践・シンボルが、ツーリズムなどの場において、魅力ある商品としてやりとりされている状況を指摘し、宗教的な商品を求める消費者とそれらを提供する供給主体とでマーケットが形成されていることに注目を向けている⁵。

以上のように、現代の宗教状況を考察する上で、宗教の消費に関する視点は積極的に議論されている状況にあり、冒頭で言及した通り、現代の日本仏教もその渦中で変容を迎えているといえよう。

しかしながら、あらためて後述することではあるが、現状、仏教に関して、その商品化や消費という視点からの研究が十分に蓄積されているとはいえない。さらに、マスメディアやSNSの影響によって、観光が一部の大規模寺院のみが関わる現象ではなくなっているにも拘らず、観光化にともなう仏教の変容を真正面から把握しようと試みる、仏教界や仏教研究者の意識も、現実の勢いに追いついていないように思われるのである。

そこで、本稿では「宗教の資源化」という視点から、とりわけ仏教寺院の観光化に焦点を当て、その過程で仏教文化がどのように資源として活用されてきたのか、特に仏教者内部（寺院）からではなく、仏教者の周辺、外部に位置する行政の動きから注目することを試みる。

以下ではまず、宗教の文化資源化に関する先行研究を概観し、あらためて本稿の視点を確認する。次に、具体的な事例として、柴又帝釈天（日蓮宗経栄山題経寺）（写真1、2）をランドマークとする柴又地域の観光政策を取り上げ、仏教文化を観光資源として活用するプロセスに着目する。最後に、そのプロセスのなかで、仏教の意味付けにどのような変化が生じたかを考察することで、寺院や宗教者という宗教内部者のみならず、その周辺で関わり合う行為者が、仏教の意味付けの変容にどのように関与しているのかを明らかにしていきたい。



写真2 柴又帝釈天参道商店街
2017年8月17日 筆者撮影



写真1 柴又帝釈天二天門（庚申の日）
2016年6月7日 筆者撮影

(一) 宗教と文化資源化

現代の消費主義的な宗教状況が、宗教的な商品を求める消費者とそれらを提供する供給者との交渉によるマーケットで理解されうることは既述の通りであるが、その商品化のプロセスを「資源化」と捉え、仏教文化を資源化される対象と捉えた場合、ここでは何が焦点化され、問題にされているのであろうか。

森山工によれば、あるものを「資源にする」とは、「ある主体がある対象物を対象化し、それを何らかの目的と意図のもとに活用する」という現象を指し、ここでは対象物が「新たな意味なり価値なりを付加され、新たな使用の文脈に差し挟まれる」という。⁶⁾そして、ある「文化が資源化される」という語彙でもって焦点化されるのは、その動的なプロセス、資源化する行為主体の具体的な働きかけと、その働きかけの場であるという。

つまり、宗教が文化資源化される場合、そこにはある動機・目的のもとに宗教を活用する主体と、新たな意味付けをなされた宗教文化資源が存在するということになる。

この資源化の傾向は、とりわけ観光化において、あらゆる宗教で顕著である。たとえば、カトリックの巡礼地として知られるサンチャゴ・デ・コンポステーラは、自分探しといった付加価値によって信仰者以外の人々にとっても魅力のある聖地となっている。⁷⁾イスラームにおいても近年、観光形態としての「イスラミック・ツーリズム」の発展によって、従来は宗教実践として行われてきた巡礼行為に、市場経済の介入と商品化の特徴を見出させるといえる。⁸⁾国内でも同様に、四国遍路や、山岳信仰の聖地である熊野、長崎のカトリックツーリズムなど、世界遺産登録や観光政策のなかで宗教が商品として資源化される現象は事欠かない。⁹⁾

また、日本仏教に関しても、大正大学の行う「にぎり仏ワークショップ」や「仏像彫刻教室」の報告や、大阪の浄土宗應徳院の、寺院を演劇活動や講演会の場として提供し人々の交流の拠点を目指す取り組みなど、地域社会に仏教

文化や寺院をどのように活用するか、といった形で、仏教の文化資源化に関する積極的な模索が行われている様子を見ることができる¹⁰⁾。このように、仏教においても文化資源としての活用に関する取り組みが向けられているものの、それらの先行研究は事例研究にとどまり、森山が指摘するような、資源化のプロセスを焦点化するものではない。

また、活動の主体として取り上げられているのは仏教系大学や地域の寺院といった宗教者内部のコミュニティであり、宗教者外部に対する注目は薄い。しかしながら、仏教の文化資源化に関わるのは仏教者だけではない。藤村健一は、京都の拝観寺院の意味付けをめぐる問題のなかで、京都市という行政と諸寺院との古都税紛争における交渉に注目し、宗教空間と文化遺産という寺院の二つの性格が、互いに対立する形で緊張関係をはらんでいたことを指摘した¹¹⁾。ここには、宗教空間を保持する宗教者内部の動機と、文化資源として寺院を観光に活用したい行政の思惑との拮抗関係が見られるのである。また、近年では寺院の境内地内に文化財指定された仏像や建物、木々を持つ寺院も少なくないが、それらもまた行政による資源化と関わりが深いといえよう。

そのため、仏教の文化資源化を論じる際、仏教者内部のみならず、仏教者外部の主体による影響を考慮に入れることは肝要であり、ここに行政という視点から仏教の変容を捉える必要性が示されるのである。

そこで以下では、仏教外部から仏教文化を資源化する主体として行政に着目し、東京都で初となる国の「重要文化的景観」に選定された柴又地域を事例に、その試みにおいて、いかに葛飾区観光課が仏教文化を活用していったのかに言及していきたい。

（二）柴又帝釈天の庚申信仰と帝釈人車鉄道

本稿で事例の対象とする柴又は、東京都葛飾区に位置し、映画『男はつらいよ』シリーズのロケ地としてよく知ら

れている。¹²そのため、一見すると柴又は映画のヒットによって多くの人々を受け入れるようになった土地であるように思われるが、実際はその観光化の契機は、映画の放映以前、江戸期の庚申信仰¹³による柴又帝釈天への参詣、帝釈天詣でにまでさかのぼることができる。¹⁴

柴又帝釈天の通称で知られる日蓮宗経荣山題経寺は、寛永六（一六二九）年創立、禅那院日忠上人開山、第二世題経院日荣上人を開基とするが、その呼称は題経寺の寺宝である、帝釈天王の彫られた板本尊に由来している。¹⁵その板本尊は長らく所在不明であったが、安永八（一七七九）年の春、第九世の亨貞院日敬上人によって、本堂の改築の折に梁上より発見される。この板本尊出現の日が曆上の庚申の日にあたったことから、六十日に一度めぐってくる庚申の日を縁日として、柴又帝釈天と庚申信仰が結びつくこととなる。¹⁶

以降、帝釈天のご利益は江戸へ出入りする柴又の農家らによって広められ、当時江戸で庚申信仰やレクリエーションとしての寺社参詣が流行していたことや、災害や飢饉の際に江戸で出開帳をしたことからもその名を知られるようになり、江戸市中や関東近郊から多くの人々が参詣に訪れるようになる。ここにおいて帝釈天詣で、つまり巡礼の地、観光地としての柴又帝釈天がはじまったといえるだろう。

帝釈天詣での流行は江戸期より引き続き、やがて徒歩で田圃路を往来していた参詣路に変化が生じる。その流行によって参詣時の交通の利便性をはかるため、鉄道が開通することとなるのである。¹⁸

明治二十九（一八九六）年、日本鉄道土浦線（現在のJ R常磐線）の開通、その後の金町駅までの路線拡張によって、上野駅から徒歩で四時間ほどかけていた往來は、明治三十八（一九〇五）年時点で上野―金町間まで鉄道で三十分の移動に短縮された。しかしながら、金町駅から柴又帝釈天までは引き続き徒歩で二十分ほどの移動を要していた。

このような状況下で、さらなる利便性をはかるべく、金町村の二葉喜太郎の着想により、金町―柴又間をつなぐ帝

釈人車鉄道（写真3）敷設の構想が立てられた。

二葉らの計画によって、明治三十二（一八九九）年に帝釈人車鉄道株式会社が設立された後、わずか三か月で帝釈人車鉄道は竣工し、同年の納め庚申にあたる十二月十七日に開業の運びとなった。人車鉄道は常磐線金町駅から柴又までの一・四kmを走り、乗車賃は片道五銭、往復九銭で、少し大型の屋根付きトロッコに最大六名、混雑時には八十名を乗せ、六十センチ幅のレールの上を、柴又帝釈天の寺紋をあしらったハッピを羽織った押夫が人力で運ぶものであった。

旅客と収入は安定しており、年間約七〜八万人、明治四十年（一九〇九）九月の庚申の日には一日で最多の一万一千人を乗せたとの記録があり、庚申の日の旅客が年間収入の六割を占めていたという。「庚申の日には一万人を越す利用客があったが、普段は百人にも満たなかった」¹⁹、「庚申の日には百二十人前後を臨時に雇用し、車両一台を二名に受け持たせた」といった記述もあり、あらためて帝釈人車鉄道が柴又帝釈天の参詣客をターゲットとして開通されたものであること、そして、江戸期からはじまった帝釈天詣で



写真3 二天門と帝釈人車鉄道停車場 葛飾区郷土と天文の博物館絵葉書

の勢いを引き継ぎながら明治期以降の存続を支えていった重要なファクターであることをうかがい知ることができる。その後、帝釈人車鉄道は大正元（一九一三）年には、京成電気鉄道（現在の京成電鉄）に回収され、金町―柴又間に加えた高砂までの路線拡張によって、常磐線、京成本線への接続が可能となり、さらに多くの参詣客の受け入れが促進された。大正元年には参道商店街の発足にもなっており、当初は庚申の日にのみ周辺農家が半商半農で営業を行っていた門前に常設の店舗が建ち並ぶようになり、次第に現在の参道の景観が整っていく。

以上のように鉄道による交通網の拡充、それに伴う参道商店街の形成と参詣客の賑わいからは、柴又帝釈天の庚申信仰と帝釈天詣でが、柴又地域の観光地としての発展にとって歴史的に重要な役割を担っていたことが看取できるのである。

（三）行政による庚申信仰の文化資源化

これまで見てきた通り、柴又地域の発展の契機は、柴又帝釈天の庚申信仰にまでさかのぼることができるが、現在の歴史が「下町情緒あふれる」柴又地域の魅力として表現され、葛飾区の観光政策において積極的に活用されている。本節ではとりわけ、葛飾区的重要文化的景観選定に向けた試みとの関連で、①「葛飾柴又寅さん記念館」における庚申信仰の活用事例と、②重要文化的景観選定記念に行われたプロジェクトのイベントを取り上げたい。

重要文化的景観「葛飾柴又の文化的景観」選定事業の概略

事例に先んじて、葛飾区行政の重要文化的景観選定事業の歴史的概略に触れたい。²¹⁾

重要文化的景観とは、文化庁により平成十六（二〇〇四）年に施行された文化財保護制度である。風土に根ざして

営まれてきた人々の生活や生業のあり方を表す景観地を「文化的景観」として評価する政策で、そのなかで特に重要とされるものが「重要文化的景観」として選定される。この制度によって、魅力ある地域づくりの推進や地域コミュニティの活性化などが期待されており、令和元（二〇一九）年の時点では全国で六十五件が登録されている。²²

柴又地域が「葛飾柴又の文化的景観²³」として登録されたのは平成三十（二〇一八）年のことであるが、実際に柴又においてその機運が高まったのは平成二十二（二〇一〇）年であり、それは平成十六（二〇〇四）年より続く、柴又帝釈天参道の景観に対する取り組みをうけたものであった。さらに、景観に対する意識の端緒は、その取り組み以前、昭和六十三（一九八八）年にまでさかのぼることができる。

昭和六十三（一九八八）年当時、映画『男はつらいよ』シリーズのヒットにより、観光客でにぎわう柴又の参道における店舗の建て替えによって、柴又帝釈天の山門が見えにくくなった。それを発端とし、当時の住職が参道商店会に建築協定を提案し、町並み保全のための紳士協定を結ぶ。

さらに、平成七（一九九五）年には『男はつらいよ』シリーズが終了し、それにとまなう観光客の減少を受けて、新たな柴又の魅力を発信していく必要を地元の人々が感じるようになる。その一方で、柴又帝釈天門前にマンションを建設する計画が浮上したことから、地元住民において景観保持の意識がさらに高まり、参道商店街「神明会」を中心に、町並み保全の取り組みが本格的に動いていくこととなった。平成十六（二〇〇四）年に神明会を母体とした特定非営利活動法人柴又まちなみ協議会が発足し、平成二十（二〇〇八）年に「柴又まちなみ景観ガイドライン」が策定された。

この町並み保全の動きとともに、葛飾区に対して葛飾柴又の歴史的・文化的資源の保全と活用に関する要望が増えたことから、行政の課題としての文化財行政の取り組みが始動した。以降、葛飾区文化財保護審議会において、平成二十二（二〇一〇）年に予備調査が行われ、その結果、個々の文化財をそれぞれ保護するのではなく、地域一体を面

として捉え保全していく必要が示され、文化的景観事業が立ち上がることとなった。

その後、平成二十三（二〇一一）年度から四年間をかけ、国の補助事業として柴又地域文化的景観調査委員会による調査が行われ、様々な地域開発をとめないながら、平成三十（二〇一八）年の「重要文化的景観」選定に至った。

本稿で扱う二つの事例も、『男はつらいよ』シリーズ終了後の新たな柴又アピールの模索から、重要文化的景観選定に至るまでの大きな流れのなかに位置している。ここでは二つの事例を通して、いかに庚申信仰が柴又地域の魅力として再指向され、活用、資源化されたのか、そのプロセスに着目していく。

① 「葛飾柴又寅さん記念館」における帝釈人車鉄道の展示

平成九（一九九七）年に開館した「葛飾柴又寅さん記念館」は、平成五（一九九三）年に整備された江戸川河川敷の「柴又公園」内、「葛飾区観光文化センター」の中に、下町情緒あふれる観光拠点として設立されたものである。

その設立の意図は、「葛飾柴又が観光名所として全国的に知られるきっかけになった、映画『男はつらいよ』の業績をとどめ、映画の世界を再現することで、日本人の故郷を感じ取ってもらおうとの思い²⁴」によるという。以上から、設立当初は、行政の観光政策の一環として、『男はつらいよ』に関する観光名所としての位置づけを担っていたと考えてよいだろう。

しかしながら、現在館内の展示には、『男はつらいよ』関連の展示とともに、帝釈人車鉄道にまつわる展示が置かれている。先に言及した通り、帝釈人車鉄道は柴又帝釈天の庚申信仰にまつわる列車で、映画との関連は見いだせない。その背景を先取りすれば、そのような宗教文化が『男はつらいよ』に関連する展示と同居するようになった経緯には、葛飾柴又の文化的景観事業にまつわる庚申信仰の歴史・伝統性の再評価が関わっているのである。以下、葛飾柴又寅さん記念館における帝釈人車鉄道の展示の変遷を見ていきたい。

記念館では、開館以来、約三年ごとにリニューアルという形で展示の変更を行っている。その概要は表1の通りで

表1 葛飾柴又寅さん記念館 展示の変遷概要

実施年	変更内容（一部）	実施意図
平成12年	柴又参道ミニチュア模型を新設	新規入館者とりピーターの確保
平成15年	帝釈人車鉄道ミニチュア模型を新設	展示内容のマンネリ化解消
平成18年	壁面展示や映像を大幅に更新	新規入館者とりピーターの確保
平成21年	第一作以前の寅さんのジオラマを新設	新規入館者とりピーターの確保
平成24年	朝日印刷所を完全再現 監督の業績を紹介するミュージアムの 新設	言及なし
平成27年	「帝釈人車鉄道」の客車を再現 列車のボックスシートの窓から映画の 鉄道関連のシーンが上映されるように	「寅さんの旅」をテーマに展示を追加
平成28年	山田監督の近作コーナーと 近況紹介の展示を新設	「半世紀を越え、新たな映画づくりへ」 をテーマに

（葛飾区観光文化センター提供資料より一部抜粋、筆者作成）

あるが、帝釈人車鉄道の展示にまつわるリニューアルは、平成十五（二〇〇三）年の第二回目と、平成二十七（二〇一五）年の第六回目に行われた。

第二回目、平成十五（二〇〇三）年のリニューアルにおいては、帝釈人車鉄道のミニチュア模型（写真4）が新設されており、その経緯として「展示内容のマンネリ化を避け、常に新しい話題を提供する」という意図が示されている。つまり、この時期葛飾区においてはシリーズの終了した『男はつらいよ』に対して、刷新するような魅力ある展示を目指していたと考えられる。そして、この時期は丁度、柴又帝釈天参道商店街において新たな柴又アピールの模索が叫ばれ、町並みの保全に対する

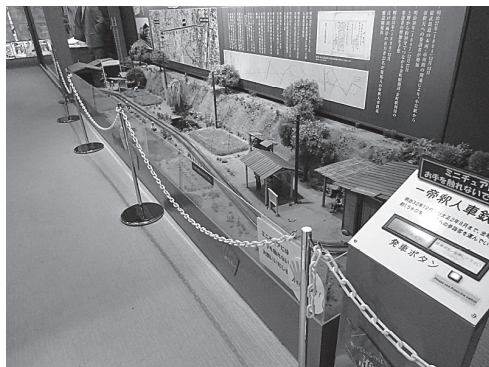


写真4 帝釈人車鉄道ミニチュア模型
2019年6月22日 筆者撮影

動きが始動したのと同時期にあたる。

すなわち、第二回目のリニューアル期は、『男はつらいよ』にとどまらない、柴又の魅力があらためて考慮された時期であり、その流れの中で帝釈人車鉄道の展示が行われたといえるだろう。

また、第六回目、平成二十七（二〇一五）年のリニューアルでは、帝釈人車鉄道にまつわる展示スペースが拡大し、「葛飾柴又鉄道 故郷駅」のコーナー内に、帝釈人車鉄道の客車のレプリカが配置された（写真5）。同時に、「鉄道の旅」というテーマに

沿って、映画における列車移動のシーンを、鉄道のボックスシートを模した座席上から見学できるような展示が新設された（写真6）。このリニューアルからは、人車鉄道の展示の拡張によって当時の信仰の営みがさらにクロージョアップされたこと、また「鉄道」「旅」という共通点のもとに庚



写真5 帝釈人車鉄道客車レプリカ
2019年6月22日 筆者撮影



写真6 列車のボックスシートと上映の様子
2019年6月22日 筆者撮影

申信仰と『男はつらいよ』の世界観がゆるやかに結びつけられたことを確認できる。また、「故郷」という形で両者を結びつけることで、映画『男はつらいよ』だけではない葛飾柴又の魅力として、庚申信仰の歴史までを含めた原風景、当時の営みが評価、表象されていることがわかる。

以上をまとめれば、記念館のリニューアルの変遷には、その運営に携わる葛飾区が、庚申信仰を再評価し、映画の世界観と結びつけることで、葛飾柴又の魅力のひとつとして表象するという、資源化のプロセスを見出すことができるのである。そして、この第六回目のリニューアルは、葛飾区が重要文化的景観選定事業を推進していた時期にあり、そのためこの時期に庚申信仰にまつわる営みが拡張されたことは、葛飾区という行政が観光化のため、そして文化財の活用のために仏教文化を評価し、資源化したという事実を示しているのである。

実際に、記念館の総括責任者、横山氏によれば、葛飾区観光文化センターとしての役割も担う記念館において、「葛飾の観光の歴史として、帝釈人車鉄道が多くの参詣客を運んだ歴史は伝えるべき」と判断したため、一見映画とは無縁の記念館において、庚申信仰の歴史を伝える展示を置いているのだという²⁶⁾。

つまり、ここにおいて庚申信仰は、宗教的な意味付けというよりはむしろ、その歴史という点で評価されているのであり、葛飾柴又の観光化の歴史を伝えるための資源としての機能を担っているのである。

②重要文化的景観選定記念「柴又帝釈天×プロジェクト」

庚申信仰の資源化のプロセスを説明しうる事例として、次に重要文化的景観選定記念に行われたプロジェクト「マッピングのイベント」に言及したい。²⁶⁾

「葛飾柴又の文化的景観」選定から一年を記念して、葛飾区は補正予算を計上し、柴又帝釈天境内のライトアップイベントとプロジェクト「マッピング」を企画した。それにともない、イベント実行委員会が組織され、葛飾区観光課が行う夜のイベントに加え、昼の催しが企画されることとなった。イベント実行委員会は、一般社団法人葛飾区観

光協会、特定非営利活動法人柴又まちなみ協議会、柴又自治会、柴又神明会、一般社団法人葛飾区観光協会柴又支部、葛飾区観光課、柴又帝釈天からなり、イベントの内容について協働で検討を行った。その結果、平成三十一年三月四日から十日の一週間にかけて行われる柴又帝釈天境内のライトアップと、三月九日、十日の土日にかけて柴又帝釈天の祖師堂と回廊を利用して行うプロジェクト「葛飾柴又今昔物語」の展示、「柴又まち巡りスタンプリール」や、柴又帝釈天境内での「はしご乗り」の披露など様々な催しを行うこととなった。

このように行政が地域と連携して行った選定記念イベントは、全体として約四万八千人の人数となり、一日四回、各千人の定員を予定していたプロジェクトも、二日間で計約一万人が訪れたという。イベントの集客からは、重要文化的景観選定が柴又地域の観光化にもたらす影響の規模をうかがい知ることができるだろう。

以下では特に、プロジェクトの内容、ナレーションと映像に注目していきたい。この企画が葛飾区の予算を投じて行われたものであること、またその内容の企画と検討を葛飾区観光課が主導したことから、プロジェクトの内容には、葛飾区観光課が重要文化的景観事業の中で重視しているものが反映されていると考えられるためである。そして、このプロジェクトでメインテーマとして採用されているのが、庚申信仰であり、そのためプロジェクトの内容からは、行政がいかに仏教文化に価値を見出し、表象しているかをうかがい知ることができるだろう。

プロジェクトマップは、「参道の 賑わい 楽し 帝釈天」に続くナレーション（図1、筆者作成）のち、音楽とともにアニメーションが映し出される構成となっている。²⁷

ナレーションでは、柴又帝釈天の庚申信仰の様子が語られる。そこではその信仰、伝統と景観との結びつきが語られることで、重要文化的景観における原風景を強調する形で庚申信仰が活用されている。

参道の 賑わい楽し 帝釈天。

帝釈天の縁日の前夜は「宵庚申」。

江戸の頃は一面の田園風景に提灯の明かりが江戸市中から柴又まで延々と続いた。

参道には人々が溢れ、名物を商う店が立ち並び

帝釈天境内は参詣の人々で埋め尽くされていたという。

時代は移り、先人から受け継ぎ次世代に繋げていこうと

いまもそろいの法被（はっぴ）にうちわ太鼓で

纏（まとい）の練奉納（ねりほうのう）を続けている人々がいる。

信仰が、伝統が、生きざまが、景観として今も確かに残っている。

江戸も昭和もここでは確かに息づいている。

まばゆいばかりの光の籠や、お堂を群邪（へきじゃ）からお守りする猿たち。

ほかにも帝釈天ゆかりのたくさんの役者が揃った。

SHIBAMATA NIGHT

いまに甦る「宵庚申」。

今宵、ひとときの夜の宴にあなたは魅せられる。

ナレーション（筆者書き起こし）

図1 プロジェクションマッピング ナレーション

また、庚申信仰のみならず、柴又帝釈天の節分問答や御神水といった宗教的な事物がコンテンツとして象徴的な形で映し出され、その他にも近隣の柴又八幡神社の獅子舞や、江戸川の花火などが、アニメーション映像として葛飾柴又の代表的な景観としてアピールされている。

つまり、ここにおいて柴又帝釈天の庚申信仰や、その他の宗教文化は単に宗教的な意味付けを超えて、「信仰の時代の様子が今も景観に残っている」ことの表象として、活用されているといえよう。このプロジェクションマッピングの事例においても、先の事例と同様に、行政の試みにおいて庚申信仰やその他の宗教文化が、葛飾柴又の文化的景観事業のなかで再評価、再解釈され、景観の歴史や伝統を担保する機能をもって資源化されている様子を見出すことができるのである。

(四) 仏教文化の再文脈化

これまで、本稿では葛飾区による宗教文化の資源化という視点から、重要文化的景観選定にまつわる二つの試みを取り上げた。以下、本節では事例を踏まえ、改めてその資源化のプロセスを考察していきたい。

森山の指摘を振り返れば、資源化のプロセスにおいては、「ある主体がある対象物を対象化し、それを何らかの目的と意図のもとに活用する」という動的な働きかけがあり、そこでは対象物が「新たな意味なり価値なりを付加され、新たな使用の文脈に差し挟まれる」という。この論を参照しながら結論を先取りすれば、葛飾区の試みは以下のような資源化のプロセスとして解釈が可能だろう。

すなわち、葛飾区は、庚申信仰という仏教文化を、柴又の歴史・伝統を象徴するものとして評価し、重要文化的景観にまつわる事業の中で、柴又の景観に残る文化を代表するものとして活用したのである。

ここで庚申信仰の再評価、活用という資源化のプロセスを行政の観光政策の中で段階的にとらえれば、(一) 模索期、(二) 発展期、(三) 成熟期、の三段階で区分できるだろう。本稿でとりあげた事例に即せば、(一) 模索期から(二) 発展期は、葛飾柴又寅さん記念館における展示の変遷に表れており、重要文化的景観選定記念のプロジェクト「ヨンマッピング」の事例は、(三) 成熟期の試みにあたるといえる。

葛飾柴又寅さん記念館においては、先述の通り、展示の変遷を経て、庚申信仰にまつわる帝釈人車鉄道の展示が次第に拡張されている。第二回目的リニューアル時は、『男はつらいよ』のみにとどまらない(一) 柴又の魅力の発見が模索されていた時期にあたり、そこで人車鉄道のミニチュア模型が展示され始めたことは、庚申信仰が記念館にとって評価の対象となったことを示している。さらに、第六回目的リニューアルでは鉄道という共通項のもと、映画の世界観と結びつけられながら、人車鉄道の客車展示が追加されることで、さらに庚申信仰の営みがクローズアップさ

れる。その段階は、行政において（二）重要文化的景観選定事業が進んでいた渦中の時期にあたり、その核である柴又帝釈天の庚申信仰が、柴又地域の歴史・伝統性を表象するものとして、さらに重視されるようになっていたことを示しているといえよう。

プロジェクトシンマッピングは、重要文化的景観選定一周年を祝い開催されたイベントということもあり、選定に向けた取り組みがひと段落し、さらに柴又地域の魅力を発信させていく（三）成熟期にあたる試みと捉えられる。特に、プロジェクトシンマッピングにおいては庚申信仰の宵庚申がメインテーマとなっていることから、選定後においては、柴又地域の歴史・伝統性を表象する上で庚申信仰が必要不可欠なものとして評価されていることが看取できる。以上のように庚申信仰という仏教文化の資源化のプロセスは、（二）～（三）の段階を経た重要文化的景観選定事業にもなっており、庚申信仰が柴又地域の歴史・伝統性を表象するものとして強調され、重要視されていく様子を通してうかがうことができるのである。

さらに、その資源化のプロセスにおいて指摘されるのは、庚申信仰が段階を経て重要視、強調されていくにも拘らず、その宗教性はむしろ、葛飾柴又の歴史・伝統性という文脈において次第に後景化していくように思われる点である。

既述の通り、重要文化的景観に関わる行政の試みにおいて、庚申信仰という仏教文化は、信仰生活を支えた帝釈天車鉄道の歴史性や、今も景観にあらわれ息づいている信仰生活、といった要素を強調しながら、「下町情緒ある」柴又の文化の伝統・歴史性を表現するものとして活用されていた。ここでは庚申信仰の宗教性そのものが直接的に表現されているのではなく、信仰世界の暮らし・生業という観点から、歴史・伝統性というより広い文脈のもとで再編成され、表現されている。それゆえに、ここにおいて注目されているのは仏教というよりも文化であり、仏教文化は柴又地域の景観にあらわれる歴史・伝統という文脈を代表するものとしての機能を担っているといえる。

さらにその表象に着目すれば、本事例における庚申信仰は、地域の歴史・伝統という新たな文脈のもとで資源化される過程で、映画『男はつらいよ』やプロジェクトジョンマッピングといった、元来宗教とは関係のない対象物と組み合わせられ、観光資源として活用されているのである。大塚和夫は「信仰や実践（儀礼）そのものやそれらにかかわる物品などが貨幣で購入できるものになる、すなわち商品化するようになれば、聖と俗との境界線は曖昧になり、時には溶解してしまう」として「通約可能性（commensurability）」という表現を用いたが、観光政策におけるこのような宗教的事物と非宗教的事物のブリコラージュと再文脈化は、まさに現代の仏教が消費社会から影響を受け、変容していることを示唆しているといえるだろう。

そしてその動きが、柴又帝釈天のような宗教者内部というよりも、むしろ外部（行政による重要文化的景観選定事業）の試みによって、それらの主体に主導される形で行われていたことは、観光化という現象のみならず、仏教の現代的な状況を考察する際に、宗教者内部の動きからでは捉えきることのできない様相があること、宗教者外部というアクターへの着目の必要を示していると考えられよう。

つまり、仏教が文化資源化される際、そこには宗教内部のみならず、宗教外部の動きも介在しており、あらゆる思惑や意図、状況が交錯しながら仏教文化そのものの意味付けが再編成される。宗教的な価値いかにかわらず、仏教文化それ自体の意味付けは観光化や消費といった社会現象のなかで常に交渉され続けているのである。

おわりに

本稿では、葛飾区による柴又地域の重要文化的景観に関わる事業のなかで、庚申信仰という仏教文化の意味付けや文脈がいかに変化し、資源化されたかに注目してきた。

その結果、行政の試みにおいては庚申信仰が、文化的景観事業で核となる「下町情緒あふれる柴又」の歴史・伝統

性を表現するものとして評価され、その他の非宗教的事物と組み合わせられ再編成されながら、活用されてきたことを確認するに至った。

さらにこのような考察からは、仏教の現代的な様態や状況を捉える際、観光という社会現象や資本主義経済などの影響、また宗教者外部の動きまでも含めて検討し、その交渉・再形成の過程に注目していく必要性があることが示されたといえるだろう。

そして、本稿では詳しく触れられなかったが、ここで見た行政の動きの背景には、仏教に関わる要素、寺院や信仰を地域の観光政策に活用する上で、文化という文脈にのせる必要性、再文脈化をしなければならない状況があることにも言及しておきたい。行政における宗教の資源化と観光政策には、直接的に宗教に対して財源を確保することの大きな行政の事情、宗教と公的機関との政治的な問題も垣間見えるのである。

さらに、今後の課題として、宗教内部者である寺院や宗門組織、そこに関わる檀信徒や地域住民、その他の参拝者といった行為者間との動きのなかで改めて問い直す必要があることも確認しておきたい。それは、伊藤雅之が文化資源の受け取り手に着目し、「特定の価値が社会に広がっているといっても、その受け止め方は担い手たちによって大きく異なる可能性がある。…当事者たちが、どのように多様な選択肢のなかから自らのアイデンティティにふさわしい信念やシンボルを獲得し、自己の意味世界を構成していくのかの解明が必要となる」と述べるように、また藤村健一が行政の観光政策に対する寺院側の自己規定の変容に着目したように、常にあらゆるアクターの意図や視点が交錯するなかで、宗教は変容していると考えられるからである。また、冒頭で言及したように、現代において人々が宗教や宗教に関する情報に触れるツールとして、雑誌やインターネットといったメディアの影響も等閑視できない。そのため本稿では詳しく触れることのできなかった諸アクターについては今後別の機会にて取り上げ、改めてその動的なプロセスを全体的に考察することを今後の課題としたい。

註

- (1) 鶴飼 (二〇一五)、櫻井ほか編 (二〇一六)、ほか。
- (2) 日本人の宗教意識に関するNHK放送文化研究所の調査によれば、「普段信仰している宗教はない」と答える人は全体の約六割、また何らかの宗教を信仰している人のうちでも「信仰心がある」と答える人は約半数にすぎないという (NHK放送文化研究所 (二〇一九)「日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか」ISSP国際比較調査「宗教」・日本の結果から) (https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190401_7.pdf)。
- (3) 宗教情報リサーチセンター (二〇二〇)、ほか。
- (4) 井上 (一九九六) 二二二―二三三頁、井上 (一九九九) 二〇―五九頁、参照。
- (5) 山中編 (二〇二〇) 一一一〇頁参照。
- (6) 森山 (二〇〇七) 六六―六七頁参照。
- (7) 岡本 (二〇一二)、岡本 (二〇一五)。
- (8) 安田 (二〇一五)、安田 (二〇一六)。
- (9) 門田 (二〇一〇)、天田 (二〇一九)、ほか。
- (10) 上田 (二〇〇四)、河田 (二〇一六)。
- (11) 藤村 (二〇一六)。
- (12) 葛飾区の統計によれば、観光入込客数は柴又地域のみで年間約一八三万五千人とされている (葛飾区産業観光部観光課 (二〇一八))。
- (13) 庚申信仰とは、もとは中国の道教の「三尸 (さんし) 説」を取り入れた信仰で、人間のなかにいる「三尸」という虫が、庚申の夜、宿主の寝ている間に天に昇り、天帝に宿主の行為の善悪を告げてしまうため、その度合いによって宿主の寿命

が縮められてしまうところ、庚申の日に昼夜寝ずに、翌朝を待つて青面金剛や庚申塚へお参りする「庚申待ち」を三回、七回と繰り返せば、この三尸が絶え、心身健康となり寿命を長めることができる、という信仰にもとづくものである（望月（一九九七）六〇頁参照）。

(14) 柴又帝釈天板本尊発見の経緯とその後の庚申信仰、帝釈天詣について、望月（一九八八）、望月（一九九七）ほか、帝釈天公式ホームページ (<http://www.taishakuten.or.jp/>)、最終アクセス二〇二〇年二月二十九日、などに詳しい。

また、帝釈天詣での流行から、映画『男はつらいよ』シリーズのヒット、現在までに至る観光化の流れについては、小高（二〇一七）、小高（二〇二〇）ほか、に詳しい。

(15) 板本尊の形状については望月良晃の記述に詳しい。望月によると、板本尊は長さが二尺五寸（七五cmほど）、幅が一尺五寸（四五cmほど）、厚さ五分（一・五cm）程度で、片面には「南無妙法蓮華経」の御題目、その左右に両尊四菩薩、両脇に『妙法蓮華経』「薬王菩薩摩訶萨」の「此の今日は則ち為れ閻浮提の人の病之良薬なり。若し人、病有りて是の経を聞くことを得ば、病則ち消滅して不老不死ならん。」の「病即消滅の文」、下に日蓮聖人の花押、そして五月末日と刻され、もう片面には、右手に剣を持ち、左手を開いて忿怒の表情をした帝釈天王の像が彫られ、これは除病延寿・悪魔降伏の尊形を示しているという（望月（一九九七）六〇頁参照）。

(16) 望月によれば、道教由来の庚申信仰が仏教の信仰として帝釈天王と結びつけられたのは、道教の「三尸（さんし）説」における天帝の役割と、仏教における帝釈天王の役割が似ていたためであるという。天帝の役割については（一三）のとおりであるが、帝釈天王の役割は、自らの罪を懺悔する「斉日」に使者を遣わして、天下万民の所業を觀察させることである。この、使者を遣わして人間を觀察するという点に庚申信仰の天帝との共通点が見られたために、帝釈天が天帝として庚申信仰の主尊のひとつとなったという。また、日蓮聖人自身も、帝釈天を守護神として重要視していたことが、御遺文の引用などからも看取できるという（望月（一九八八）一一九―一二七頁参照）。

そのため、庚申信仰と帝釈天王の類似、日蓮聖人による帝釈天王の重視、という二重の点から、道教由来の庚申信仰が、柴又帝釈天においては法華信仰や、仏教の信仰としてゆるやかに受容されたと考えてよいだろう。

(17) 田中(一九九八)三二―三三頁参照。

(18) 帝釈天詣での流行による鉄道敷設の経緯と歴史については、白土(二〇〇四)、葛飾区郷土と天文の博物館(二〇〇六)、ほかに詳しい。

(19) 葛飾区郷土と天文の博物館(二〇〇六)九頁。

(20) 同前、二五頁。

(21) 重要文化的景観選定事業の歴史的概略に関しては、大迫(二〇一九)、田邊(二〇一三)、谷口(二〇一七a)、谷口(二〇二〇)、山中(二〇二二)、のほか、二〇二二年一月一九日に柴又帝釈天広報須山保氏にうかがった知見、二〇二二年一月二〇日に葛飾区観光課の谷口榮氏に聞き取りした知見に基づいている。

(22) 重要文化的景観、ならびに「葛飾柴又の文化的景観」については、下記を参照。文化庁ホームページ「文化的景観」(<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>)、

最終アクセス二〇二〇年一月六日、葛飾区教育委員会(二〇

一六)、谷口(二〇一七a)、谷口(二〇二〇)、ほか。

(23) 葛飾区は柴又地域を三つの区画に分けてアピールしていた
〔図2参照、昭文社編(二〇一六)「東京都区分地図22葛飾区
5版2刷」昭文社に一部筆者加筆〕。

内側の区域から順に第一のリング、第二のリング、第三の
リングと名付けられている。第一のリングにあたるのが「帝
釈天題経寺及び門前からなる空間」(柴又帝釈天題経寺／帝
釈天門前)であり、第二のリングが「帝釈天題経寺と門前を
支えたかつての農村部(微高地)空間」(国分道沿い／帝釈
天南方・江戸川河川敷沿い)、第三のリングが「大都市近郊



図2 葛飾柴又文化的景観三つのリング

- の低地開発の歴史を伝える空間」（柴又用水受水域／金町浄水場付近／江戸川・河川敷）である。第一のリングの「帝釈天題経寺」の説明では、「柴又地域文化的景観の核をなす寺院です」との言及がなされることから、葛飾柴又地域の文化的景観事業において基点となっているのが柴又帝釈天であることがうかがえる。また、三つの区域に関する説明には、昔から続いている伝統性や、「変わらない景色」の強調が共通して見られ、柴又地域の文化的景観事業において「昔ながら」の「原風景」が魅力としてうたわれ、そのなかで柴又帝釈天が柴又の「原風景」や「下町情緒」を喚起させる中心的な場として位置づけられていることがわかる（葛飾区教育委員会（二〇一六）参照）。
- (24) 葛飾区観光文化センター提供資料「葛飾区観光文化センター（葛飾柴又寅さん記念館）施設概要」。
 「葛飾柴又寅さん記念館」の概要と略歴については、同前、ならびに葛飾柴又寅さん記念館公式ホームページ（<http://www.katsushika-kankocom/fora/guide/>）、最終アクセス二〇二〇年一月八日、ほか参照。
- (25) 二〇一九年六月二二日、葛飾柴又寅さん記念館総括責任者、横山秀一郎氏より聞き取り。
- (26) プロジェクションマッピングの概要や経緯に関しては、谷口（二〇二〇）のほか、「葛飾柴又」の昼と夜を演出 SHIBAMATA NIGHTJ「都政新報」二〇一九年四月二日、(https://www.toseishinpo.co.jp/modules/news_detail/index.php?id=6704)、ならびに「江戸の熱気 音と光で」、『東京新聞』二〇一九年三月九日、東京版、一頁、を参照しとりまとめたほか、二〇一九年六月二二日に柴又帝釈天広報須山保氏に、二〇二一年一月二〇日に葛飾区観光課の谷口菜氏に聞き取りした知見に基づいている。
- (27) 二〇一九年三月九日～一〇日 葛飾柴又プロジェクションマッピング映像（「葛飾柴又」国の重要文化的景観選定記念イベント）「葛飾区広報課公式チャンネル、二〇一九年三月一日投稿（<https://www.youtube.com/watch?v=QUy3-y9SRnk>）」、最終アクセス二〇二〇年一月二三日。
- (28) 大塚（二〇一〇）一一九頁。
- (29) 伊藤（二〇〇一）五八頁。
- (30) 藤村（二〇一六）。

参考文献

- ・ 天田顕徳 (二〇一九) 『現代修験道の宗教社会学―山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化―』岩田書院
- ・ 伊藤雅之 (二〇〇二) 「宗教・宗教性・霊性―文化資源と当事者性に着目して―」、『現代宗教』二〇〇二、四九六頁、国際宗教研究所
- ・ 井上順孝 (二九九六) 『新宗教の解説』筑摩書房
 - ― (一九九九) 『若者と現代宗教―失われた座標軸―』ちくま新書
- ・ 上田紀行 (二〇〇四) 『がんばれ仏教！―お寺ルネサンスの時代―』NHKブックス
- ・ 鶴飼秀徳 (二〇一五) 『寺院消滅』日経B P社
- ・ 大迫和己 (二〇一九) 「重要文化的景観選定における生業の実態に関する研究―「葛飾柴又の文化的景観」を対象として―」、『法政大学大学院デザイン工学研究科紀要』第八号、一―八頁、法政大学大学院デザイン工学研究科
- ・ 大塚和夫 (二〇一〇) 「宗教施設の商品化とその限界」、私市正年ほか編、『グローバル化のなかの宗教…衰退・再生・変貌』、一一三―一三二頁、上智大学出版
- ・ 岡本亮輔 (二〇一二) 『聖地と祈りの宗教社会学―巡礼ツーリズムが生み出す共同性―』春風社
 - ― (二〇一五) 『聖地巡礼―世界遺産からアニメの舞台まで―』中公新書
- ・ 小高絢子 (二〇一七) 「現代社会における寺院と観光化―柴又帝釈天を事例として―」、『宗教学・比較思想学論集』第一八号、五九―七六頁、宗教学・比較思想学研究会
 - ― (二〇二〇) 「現代の寺院空間と観光化―寺院離れと寺院観光―「柴又帝釈天と観光化の歴史」」、「法華』第一二三九号、三五―四〇頁、法華会
- ・ 葛飾区教育委員会 (二〇一六) パンフレット「葛飾・柴又の歴史と文化を後世へ」葛飾区教育委員会
- ・ 葛飾区郷土と天文の博物館 (二〇〇六) 『帝釈人車鉄道―人車のゆくえを追って―』葛飾区郷土と天文の博物館

- ・葛飾区産業観光部観光課（二〇一八）「葛飾区観光経済実態調査報告書（概要版）」葛飾区産業観光部観光課（http://www.city.katsushika.jp/_res/projects/default_project/_page/001_005_986/gaiyouban.pdf）
- ・門田岳久（二〇一〇）「宗教」の資源化・商品化・再日常化―巡礼ツーリズム・及びその地域的展開からみた「生活」論としての宗教研究試論―、『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五六集、二〇一―二四三頁、国立歴史民俗博物館
- ・河田純一（二〇一六）「地域社会における仏教文化資源を用いた活動実践―にぎり仏ワークショップ」および「仏像彫刻教室」の事例より―、『宗教学年報』第三一号、三九―五三頁、大正大学宗教学会
- ・木村勝彦（二〇〇七）「長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム」、『長崎国際大学論叢』第七卷、一二三―一三三頁、長崎国際大学研究センター
- ・黒崎浩行（二〇一一）「宗教文化資源としての地域神社―そのコンテキストの現在―」、『現代宗教』二〇一一、四五―五八頁、国際宗教研究所
- ・京成電鉄株式会社経営統括部編（二〇〇九）『京成電鉄一〇〇年の歩み』京成電鉄
- ・櫻井義秀・川又俊則編（二〇一六）『人口減少社会と寺院』法蔵館
- ・佐藤正志（二〇一九）「地域民間芸能の観光資源化と地域振興―阿波踊りの事例から―」、『経営情報研究』第二六卷第一・二号、一〇九―一三〇頁、摂南大学経営学部
- ・宗教情報リサーチセンター（二〇二〇）『ラク便り』第八七号、宗教情報リサーチセンター
- ・白土貞夫（二〇〇四）「帝釈人車鉄道―客車に関するノート―」、『鉄道ビクトリアル』第五四卷一二号、七四―七九頁、電気車研究会
- ・田中紀子（一九九八）「柴又の帝釈天」、『歴史民俗学』第一〇号、三二―三四頁、批評社
- ・田邊寛子（二〇一三）「商店街を住み継ぐ―柴又帝釈天参道の継承―」、『都市計画』第六二卷第二号、一六―一七頁、日本都市計画学会

- ・谷口 榮(二〇一七a)「葛飾柴又の文化的景観と観光考古学」、考古学ジャーナル編集委員会編、『考古学ジャーナル』第七〇六号、一〇一―一四頁、ニュー・サイエンス社
- (二〇一七b)「第一回例会・基調講演 葛飾柴又の文化的景観を読み解いたプラタモリ」、『法政地理』第四九号、一〇一―一〇八頁、法政大学地理学会
- 「文化財の保存・活用の原点と観光」、『文化遺産の世界』本誌特集 Vol.33 「文化財保護——法改正」、二〇一八年一月十三日 (https://www.isan-no-sekai.jp/feature/33_07)
- (二〇二〇)「葛飾柴又の歴史的・文化的資源と観光振興」、『観光と考古学』第一号、二四―三三頁、観光考古学会
- ・津田千明(二〇〇六)「現代人と修行―羽黒町の山伏修行体験塾の事例を通して―」、『東北宗教学』第二号、一五一―一八二頁、東北大学大学院文学研究科宗教学研究室
- ・藤村健一(二〇一六)「京都の拝観寺院の性格をめぐる諸問題とその歴史的経緯―とりわけ古都税紛争に着目して―」、『立命館文學』第六四五号、六四―七九頁、立命館研究所
- ・望月良晃(二九八八)「柴又帝釈天と庚申信仰」、小花波平六編、『庚申信仰』、一一九―一三九頁、雄山閣出版
- (一九九七)「柴又帝釈天と庚申信仰」、『日本の美術』第三七五号、六〇―六一頁、至文堂
- ・森山 工(二〇〇七)「文化資源 使用法―植民地マダガスカルにおける「文化」の「資源化」―」、山下晋司編、『資源化する文化 資源人類学〇二』、六一―九二頁、弘文堂
- ・安田 慎(二〇一五)「イスラミック・ツーリズムにおける観光資源化―宗教観光の商品化・市場・コミットメントをめぐる―」、『帝京経済学研究』第七五号、八七―一〇八頁、帝京大学経済学会
- (二〇一六)『イスラミック・ツーリズムの勃興―宗教の観光資源化―』ナカニシヤ出版
- ・山中 弘(二〇〇七)「長崎カトリック教会群とツーリズム」、『哲学・思想論集』第三三号、一五六―一七六頁、筑波大学

哲学・思想専攻

- （二〇二六）「宗教ツーリズムと現代宗教」、『観光学評論』第四卷第二号、一四九―一五九頁、観光学術学会
- ・山中弘編（二〇二〇）『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂
- ・山中令士（二〇二二）「下町情緒を活かしたまちづくり―葛飾柴又商店街の取組み―」、『企業診断』第五九卷第七号、二〇―二三頁
- ・弓山達也（二〇二四）「スピリチュアリティとしての仏教」、『宗教学年報』第二九号、二〇五―二二五頁、大正大学宗教学会